

# 生研 ニュース

PHOTO 岡宮誠一

1990.5.10  
No.3

## IIS TODAY

●第3部

原田リリアン

博士研究員(写真右)

中野美由紀

助手(左)

原田リリアンさんは、今年4月に外国人博士研究員になられた。ブラジル日系2世で、83年10月の来日以来、高木・喜連川研究室で研究を続けて、今年3月に博士号を取得、今後の活躍が期待されている。専門はデータベースにおけるファイル構造の研究で、問い合わせ処理の向上をはかることが目標。来日当初はいろいろなカルチャーショックを受けたとのこと。価値観の違い、大学に男子学生しかいないこと、コーヒーのまずさ、食事の量が少ないこと、地震、雪、……などなど。ブラジルには山がないので、中野さんと登山に行くのが楽しみ。5月には自転車乗り方講習会を受けて自転車の特訓をするそうである。

今年3月に喜連川研究室の助手に昇任された中野美由紀さんは、公私にわたって原田さんの良き話し相手。専門は、データベースマシンのアーキテクチャの研究を中心にした機能ディスクシステムの開発である。新しいことは何でも試してみるのがポリシー。遅くまで研究室で過ごすことが多く、夜11時ごろ電車で帰宅途中、某教授に「家庭を大切に」と諭されたエピソードもある。毎日片道1時間15分の通勤時間に文庫本1冊を読むことを目標にしている。また、高校時代から続けている登山や旅行に行くのが楽しみで、年に1回は北アルプス・南アルプスに出かけるとのこと。御主人、御両親、生研でひろったタヌキのような肥満ネコとの5人(?)家族。

## 壊れてニンマリ 公開振動実験行われる

本所千葉実験所において2月25日、実寸の1/15の鉄筋コンクリート造試験体を用いた振動破壊実験が行われ、実構造物でいえば大破程度に至るまでの加振実験が無事成功しました。当日は本所映像技術室の協力とNHK千葉放送局の取材のもと、所内外の約50人の見守り中の公開実験となりました。この実験は、超小型モデルを用いた耐震実験手法の確立をめざして第1部岡田研究室が数年来研究を行ってきたもので、特別に製作した極細の異形鉄筋、マイクロ・コンクリートを用いた世界的にも極めて新しい試みの実験です。なお極細異形鉄筋の製作では、第2部木内研究室の協力を得ました。

試験体は1/15、しかし試験体を製作する人間は実物大、ということていろいろ苦労しながら約半年



加振終了後のひび割れ調査 (撮影：映像技術室 岡宮氏)

をかけて作った試験体も壊すには数十秒。はたから見ればもったいない気もしますが、担当者は

実験が成功してニンマリ、データの料理にあれこれ思いを巡らしているようです。(編集室 中埜 記)

## 第3回東京大学公開フォーラム 「メソスコピックエレクトロニクス」開催

標記のフォーラムが3月1日山上会館で開催された。本所を中心とした大型基礎共同研究の中間成果報告を兼ねたもので、有馬総長・岡田生研所長の挨拶ののち研究会に入った。講師は生研・工学部

・先端研・物性研・東工大・広島大からの計10名。企業よりの聴講者も多く、管理職から実務研究者まで幅広い出席を得た。講演後の懇親会でも、新しい学問領域メソスコピックエレクトロニクス(原子サイ

ズとマクロとの中間領域で起きる新現象を応用する電子工学)の将来が語り合われた。基礎研究を産学共同で行うための一つの試みである本共同研究は順調に進んでいると評価されよう。(生駒俊明 記)

### 技術職員の 組織化について

懸案の技術職員の組織化について全学の検討会の最終答申を受け、3月12日に総長が要項を裁定しました。この要項に基づいて組織化を図るべく本所でも特別委員会において組織規程の作成等を進めており、近く実施の予定です。実施に関する本所の基本方針については、部主任等を通じて周知されることになっております。(職員担当 木下 健 記)

## 平成2年 外国人研究者・留学生懇談会



3月16日(金)午後6時から健保会館で恒例の外国人研究者・留学生と本所関係教職員との懇談会が開かれた。外国人研究者・留学生101人と関係教職員42人が参加し、石田教授の司会により、本年度の世話部である第4部の部主任白石教授の挨拶があり、鈴木国際交流室長の発声で乾杯ののち懇談に入った。会なかばでは各部より外国人研究者・留学生のスピーチ等があり、最後に全員で記念撮影ののち、盛況のうちに午後8時散会した。

### Do You Know Us? 出版委員会と出版掛

パソコン通信、電子メールと媒体は増えても、生研の活動成果を世に出す主流媒体の一つは紙による出版物である。出版委員会は「生産研究」、「生産技術研究所報告」、「年次要覧」、和文と英文の「生研案内」、「生研リーフレット」の編集と発行に携わっており、原稿を出版物に仕上げる実務は総勢4名の出

版掛が行っている。生産研究は研究解説と研究速報を主体とする月刊誌である。その1989年の総頁数は962頁に達し、出版掛の仕事は校正から催促まで多種多量に及ぶ。出版委員会は毎月一回開催され、10名の委員が生産研究の特集構成、年次要覧および生研案内の編集を分担している。

世の諸事と同様に、出版委員会でも紙物による広報活動の活発化と限りのある予算との整合をとるのに頭を痛めている。制約された予算はその執行を合理化するとの利点もあるが、いつも予算制約を気にしているとアイデアが矮小化する欠点もある。幸いにして、活動成果の広報の必要性については本所構成員の御理解をいただいているので、出版が硬直化しないよう心がけている。

[出版委員会委員長 中桐 滋 記]



上:瀬崎、曾我、春口、桑原、橋掛長、武原  
(下線は出版掛)

下:須田、篠田、中桐出版委員長、安田、中埜、藤井、香川

## ● 生研訪問者

3月16日 (金)

IEEE (米国電気電子学会)

会長 Carleton Bayless ●アメリカ



4月5日 (木)

Imperial大学

学長 Eric A. Ash卿ほか1名 ●連合王国



本所とImperial大学との研究協力協定締結にむけての議論がなされた。

## ● 外国人研究者講演会

3月19日 (月)

Dr.N.N. Mansour

Research Scientist, NASA Ames Research Center, U.S.A.  
"Advancements in Turbulence Modelling"

3月28日 (水)

Prof. Luisette Priester

Paris University, France  
"Image Effects between Lattice Defects and Grain Boundaries in Metals"

3月29日 (木)

Prof. Ahsan Kareem

Structural Aerodynamics and Ocean Systems Modelling Laboratory, University of Houston, U.S.A.  
"Measurements and Analysis of Random Pressure Fields around Bluff Bodies"

4月10日 (火)

Prof. M. Hillert

The Royal Institute of Technology, Sweden  
"Diffusion Induced Grain Boundary Migration and Discontinuous Precipitation"

4月12日 (木)

Dr.Amr S. Elnashai

Department of Civil Engineering, Imperial College, England  
"Earthquake Engineering Research at Imperial College – Some Topics on R/C, Steel, and Composite Structures and Fluid-Structure Interaction –"

4月12日 (木)

Prof. L.L. Kesmodel

Indiana University, U.S.A.  
"Application of High-Resolution Electron Energy Loss Spectroscopy in Surface Chemistry and Physics"



### 生研一の早咲き桜

生研正門横の彼岸桜は、ソメイヨシノより約2週間も早く、今年は3月15日頃満開。毎年、春のおとずれをいち早く告げてくれる名物桜です。

# PERSONNEL

## ■人事異動 (平成2年3月2日～平成2年4月1日)

発令月日	氏名	異動事項	新官職(所属)	前官職(現官職)(所属)	発令月日	氏名	異動事項	新官職(所属)	前官職(現官職)(所属)
3.31	小林一輔	停年		文部教官教授 (第5部)	4.1	川勝英樹	//	文部教官講師 (第2部)	
//	竹光信正	辞職		文部教官助教授 (第1部)	//	吉川暢宏	//	文部教官助手 (第1部)	
//	平野八州男	勲褒退職		文部技官 (第1部)	//	山川哲	//	文部教官助手 (第4部)	
//	池田たつ子	//		文部事務官 (経理課施設掛 工事契約主任)	//	榑裕之	併任 継続	文部教官教授 (第3部)	文部教官教授(先端科学技術研究センター)
//	堀内昇二	辞職		文部技官 (第1部)	//	三村さと子	配置換	文部事務官電子計算機室	文部事務官総務課出版掛
//	鈴木和彦	//		文部技官 (第2部)	//	遠藤勝之	//	経理課 司計掛	経理課研究 協力掛
//	小林克志	//		文部技官 (第3部)	//	最首八重子	//	経理課 研究協力掛	総務課第3 部業務掛
//	関根富美	//		文部技官 (第3部)	//	小川雄一郎	//	経理課 研究協力掛	経理課司計掛
4.1	佐藤壽芳	昇任	通商産業省工業技術院機械技術研究所長	文部教官教授 (第2部)	//	並木稔	//	経理課 給与掛	総務課第2 部業務掛
//	難波徳郎	転任	文部教官助手(岡山大学工学部)	文部教官助手 (第4部)	//	曾我芳明	採用	総務課 出版掛	
//	三浦友也	//	厚生省社会局	文部事務官(総務課第4部業務掛)	//	三澤毅	//	総務課 第4部業務掛	
//	後藤克巳	//	神奈川労働基準局	文部技官 (第1部)	//	柳沼良知	//	文部技官 (第3部)	
//	村上周三	併任	附属計測技術開発センター長(再任)		//	小松邦紀	//		
//	中川威雄	//	附属先端素材開発研究センター長		//	鳥尾幸寛	昇任	文部事務官事務部長	文部事務官宇宙科学研究所主計課長
//	月尾嘉男	併任 継続	文部教官教授(第5部)(客員部門)	文部教官名古屋大学教授工学部	//	伊良波正之	配置換	総務課 厚生掛長	庶務部入試課入学試験第二掛長
//	福田収一	//	文部教官助教授(第1部)(客員部門)	文部教官大阪大学助教授溶接工学研究所	//	矢内敏明	//	経理課 研究協力掛長	工学部経理課経理掛長
//	松本榮三郎	配置換	文部事務官教養学部事務部長	文部事務官事務部長	//	二宮徹平	//	総務課 人事掛主任	学生課保健掛主任
//	渡邊清	//	海洋研究所総務課共同利用掛長	//	平川康弘	転任	経理課 用度掛	文部事務官国立吉備少年自然の家事業課	
//	榑引伸彦	//	農学部附属演習林会計掛長	経理課研究 協力掛長	//	佐藤千恵	配置換	総務課 第1部業務掛	経理課給与掛
//	伊藤純子	昇任	工学部 厚生掛長	総務課人事 掛主任	//	丸山正子	//	総務課 第2部業務掛	電子計算機室
//	寺門健一	配置換	アイソトープ総合センター 一応務掛	経理課研究 協力掛	//	清水要	//	総務課 第3部業務掛	総務課第1 部業務掛
//	渡邊仁之	//	経理部 契約課用度第一掛	経理課用 度掛	//	富井薫	昇任	文部技官経理課施設掛主任	文部技官経理課施設掛
//	高木幹雄	併任	附属機能エレクトロニクス研究センター長(再任)		//	重田千恵子	//	文部事務官総務課第2部業務掛国際交流主任	文部事務官 (第2部)
//	岡田恒男	事務取扱免		附属先端素材開発研究センター長	//	鈴木美佐子	//	文部事務官総務課第1部業務掛国際交流主任	文部事務官 (第2部)
//	須田義大	採用	文部教官助教授 (第2部)		//	大蔵明光	併任終了		文部教官教授(附属先端素材開発研究センター)
//	篠田純雄	//	文部教官助教授 (第4部)						

## ●平成2年度東京大学職員永年勤続者表彰式

標記の表彰式が4月12日(木)午後3時から神田学士会館で行われた。まず最初に有馬総長から本年度表彰者180名を代表して佐藤繁さん(病院)に表彰状が手渡された。

総長の祝辞の後、引き続き祝賀会が行われ、岡田所長、島尾事務部長らをまじえ被表彰者の方々との歓談ならびに有馬総長との記念撮影等もあり、なごやかなうちに午後4時すぎ式は終了した。

なお、本所の被表彰者は下記のとおりです。

第2部 大堀真敬	第4部 坂村博康	経理課 最首八重子
// 鈴木文博	// 李 清	// 滝沢正幸
// 鈴木常夫	第5部 西村次男	// 吉田幸子
// 板倉 博	総務課 薩日内いさお	



## ●退官のご挨拶

ひとりごと

教授 大蔵明光



研究テーマがみつからなくて……かつてよく耳にした言葉である。幸いにして私は研究テーマの中にうずもれていたし、今でもうずもれている。いくらでもテーマはあるものである。これは物質が相手だったからであろう。

手を汚す実験をやっていると次から次へと面白い現象が現れる。この現象を追いつけるといつの間にか本来の主テーマを見失うことがある。研究方法論を教えた下さった雀部先生は、「枝を追って幹を見失うことのないように、新しい現象、興味ある事はノートしておき枝をつけるべき時機にやることです」とおっしゃった。もちろん一般的外観だけでなく内部の構造要素も含んでのことである。この方法論を見失うことのないよう研究生活を続けたいものである。

生研の思い出

教授 小林一輔



生研には昭和33年以来、32年間お世話になった。昭和30年代の生研は未だ混沌としており、新しい萌芽的な研究が巣立つ正に離陸寸前の状態にあったと思われる。昭和40年代は高揚期であり、生研全体に熱気がみなぎっていた。その原動力は恐らく工学部に対する対抗意識ではなかったかと思われる。生研が東大から独立して単科大学になろうと言う議論が行われたのもこの時代であった。昭和50年代以降は成熟期であって工学部と研究分野を補完しつつ生研の独自性を発揮してきた時代である。

人間の一生に例えれば現在の生研は正に壮年期に当たる。生研の卒業生の1人として、母校である生研が今後はますます発展することを祈っている。

## ●東京大学勸奨退職者の表彰

東京大学勸奨退職者に贈られる、東京大学総長表彰状の伝達式が3月30日(金)12時より所長室で行われ、岡田所長より永年の勤務に対する謝辞ののち、被表彰者の答礼があった。昼食をはさみ和やかな懇談と記念撮影が行われた。なお、表彰されたのは経理課施設掛の池田たつ子さんと第1部の平野八州男氏である。



# AWARDS

## ●受賞

第3部	教授	安田靖彦	電波功績賞郵政大臣表彰	テレターミナルシステム、コンビニエンスラジオフィオン等新しい陸上移動体通信の実用化に貢献	1990.3.16
第2部	助教授	樋口俊郎	精密工学会賞	衝撃電磁力を利用した精密位置決め機構の開発	1990.3.29
第3部	教授 元大学院学生	安田靖彦 森 健一	第5回電気通信普及財団賞 (テレコムシステム技術賞) 奨励賞	自律分散交換による多重リングネットワークの一構成法	1990.3.30
第1部	助教授 元大学院学生	結城良治 曹 相鳳	日本機械学会 論文賞	異材界面き裂の応力拡大係数の境界要素解析	1990.4.1
第2部	教授 元大学院学生	棚澤一郎 宗像鉄雄	日本機械学会 論文賞	融液よりの結晶育成過程における自然対流に対する磁場の効果	1990.4.1

# INFORMATION

## ■6月7、8日(木、金)に生研公開

本年の生研公開は上記の日程で行われます。大学の学部、研究所におけるこのような一般への定期的な公開は極めてめずらしいものですが、生研公開は昭和44年より毎年この時期に行われています。生研は新しい工学の領域の創成とその学問的成果を産業界、社会と結びつけることを理念にしており、生研公開はこのような理念を反映する交流の場となっています。(研究交流委員会)

### 講演

6月7日(木)	「産業・技術の将来展望—技術は芸術をめざす—」 月尾 嘉男 客員教授
	「熱を制して技術を拓く」 棚澤 一郎 教授
6月8日(金)	「インテリジェント・マイクロ・メカトロニクス—IC技術による超小型運動システム—」 藤田博之 助教授
	「地球環境問題における工学の役割」 鈴木基之 教授
	「地震と地中構造物」 田村重四郎 教授

## ■生研国際シンポジウムのお知らせ

第6回生研国際シンポジウム「磁気軸受国際シンポジウム」が平成2年7月12日(木)から14日(土)の3日間にわたり開催されます。本シンポジウムへの参加および案内の送付をご希望の方は、第2部樋口助教授までご連絡下さい。

## ■平成2年度 常務委員会 委員名簿

吉澤 徹	鈴木 基之	高木堅志郎	二瓶 好正
木村 好次	半谷 裕彦	中川 威雄	虫明 功臣
藤井 陽一	(以上部主任)	坂内 正夫	

## ◆ シュツットガルト滞在記

◆ 第4部 市野瀬英喜

このたび1989年1月から1990年2月までの13ヶ月間、西ドイツ・マックスプランク協会からの招待で、Freimitarbeiterという身に余る待遇でシュツットガルトに滞在する機会を得た。研究の上では、たまたま私の分野（高分解能電子顕微鏡、界面の原子構造）がわが国のオハコということもあって、学問的輸出超過という得難い醍醐味を経験した。ただし、彼らの能率的な研究体制は学ぶべきところがあると感じている。かの地の生活はなかなか快適であった。うまいワイン、完備した暖房施設、広い生活空間、ゆったりと流れる時間、長い休暇、豊富な緑、迅速な移動を約束する完備した道路網といった環境条件がもたらす“ゆとり感”はなかなかのものである。



シンフォニーホール、美術館、オペラ、バレエ劇場などの充実ぶりはとても人口60万の都市とは思えない。ただ、余りにも素朴な味の料理にはつい彼らの文化を疑わしめるものがある。また、貞淑で家事に優れポテト料理に堪能な主婦が支えるという堅実の見本のようなドイツの家庭もどうやら過去のものになりつつあるらしい。グライダーが盛んで筆者もモーターグライダーを経験した。

## ◆ 海外出張を終えて

◆ 前事務部長 松本榮三郎



今後の国際交流事務に役立てるようにと、3月3～12日の10日間、イギリス、イタリア、フランスの3ヶ国へ出張させていただいた。駆け足ながらそれなりに種々感じるところもあり、楽しい旅であった。入国審査の様子を見ても、国情とか国民性の違いみたいなものを強く感じた。国家の威厳を示すのだといわんばかりに、旅客が何人待っているようが構わず

柵の所に待たせておき、一人ずつ呼んで滞日数などを質問するロンドン、パスポートを持っている日本の観光客ならフリーパス同然のローマ、人によりこまめに対応を考えてやっているふうのパリ、といった具合。

生研でも多くの外国人を受け入れている。今は教官と研究室の方々がお世話をしておられるが、今後寄付部門など増えてくれば、事務部でも否応なしに対応していかなければならない。専門の担当掛を設けて今までは全く違った事務をやるようになる時代も間近であろう。そのときにはまず言葉の問題が大きい。同時にそれぞれのお国柄とか国民性について少しでも肌で感じ取ったものを持っていれどいぶん仕事に役立つだろうと、今度の旅で強く思った。終りに、このようなよい機会を与えていただける研修旅行を、生研の制度として発足させるよう望みたい。

### 編集後記

生研ニュースの編集を担当させていただいていると、普段あまり話をする機会がない人からも、いろいろな話が伺えたりで、楽しくやらせてもらっております。また、当初の不安を打ち消すように、順調に記事も集まりつつあります。我々編集室メンバー全員、その

“精神年齢の若さ”を生かし、ユニークな内容、斬新なデザインでもって、「充実した内容」→「読まれるニュース」→「さらに充実した内容」の“正のフィードバック”を確立して行きたいと思っております。

(編集室 平川 記)